

資料(Data)

梶山今子像の研究資料

——梶山女学園創立者の一人として——

Materials for Study of Imako SUGIYAMA—as a founder of Sugiyama Jogakuen

大森 隆子*

OMORI, Takako*

梶山 美恵子**

SUGIYAMA, Mieko**

一 はじめに

平成二十七(二〇一五)年は、梶山正式・今子夫妻の手で開設された、名古屋裁縫女学校を母体とする梶山女学園の創立一一〇周年にあたる。同年十一月七日に梶山女学園同窓会(篠崎桂子会長)は梶山女学園創立一一〇周年記念同窓会・祝賀会を開催した(なお、本同窓会は五年ごとに実施)。国外から参加の二名を加え全国各地から参集した四百名余の同窓生(最高齢は九十二歳)が、学園長、理事長、学園顧問を始めとする来賓各位とともに祝賀の式典・昼食会を通してその歴史を振り返り、また今後の発展を祈念した。筆者の梶山美恵子は学園顧問・梶山歴史文化館館長として、大森隆子は梶山女学園中学校・高等学校校長として同会に出席した。参加者は各期ごとに円形テーブ

ルを囲んで着座し、旧交をあたためた。会の終了時に歌われた学園歌には、学園を敬愛する心が満ちていた。

ところで、本学園の創立者梶山正式・今子夫妻について、梶山歴史文化館リーフレットによると、梶山正式の略歴には、

明治十二年岐阜県に生まれる。女子教育を志し、裁縫教育先駆けの東京裁縫女学校(現、東京家政大学)の入学を希望するが、男子であることを理由に入学を断られる。その後、熱意が認められて校長渡邊辰五郎の門下生となった。明治三十八年には、妻・梶山今子と共に名古屋裁縫女学校を設立し初代校長となる。⁽¹⁾

とある。また「梶山歴史文化館ガイド」には、

修行時代、正式は東京裁縫女学校で、同じ志を持ち、また故郷を同じくする同窓生・中村今子と出会います。その後、明治三十八年（一九〇五）、妻となった今子と共に生徒九十名、教職員三名から成る名古屋裁縫女学校（梶山女学園の前身）の開設を実現させました²²。

と書かれている。すなわち、岐阜県出身の両者はそれぞれ女学校（裁縫女学校）の開設という志を抱いて東京へ遊学した。その地で、志と共にする同窓生という縁を持ち、学校開設へと至った。これを裏付ける資料として、東京家政大学博物館内の「卒業生が創立し、経営し、現存する学校（平成十八年十月現在）」一覧（三十一校）の中に、

梶山女学園（名古屋市）

梶山正式 創設者

梶山今（明治三十六年本科卒） 創設者

と記載されている。ちなみにここに掲載されている卒業生は、正式氏以外は全員女性である。正式氏は例外として校長の門下生となって学修が許可され、卒業式にも出席したが、卒業生としての正式な扱いはされていない。

このように梶山女学園においても、出身校においても、明治期の学校創設者として夫と共に、世間に認知されている今子夫人であるが、

(二)

創設後は時代の影響か、もしくは夫人の奥ゆかしい性格のせい、表立った活躍がほとんど記録されておらず、まとまった研究や論考の整理もされていない。この点が精力的に学園発展のために活動され、発言や論考等で学園内外に活発に発信され、業績の集積や評価もなされている正式氏とは全く異なった歩みをされる。しかしながら、創設にあたり大いに尽力し、また創設期は裁縫科教員として、また寮生の寮母として生活の全てを捧げた夫人について、明治期の女性の活躍に新たな光が当て始められた今日、学園関係者としても掘り下げる必要がある。夫人の女性としての女子教育に対する志は、正式氏のそれと一致したものだったのだろうか。あるいは多少異なる考えや志を抱かれていたのだろうか。そうした視座に立つて足跡を探索し、今日の梶山女学園の理念・精神の形成に今子夫人はどのように寄与されたのかを解明したいと考える。今年度は、基礎資料の集積と提示という観点から、学園機関誌である『糸櫻』、『糸菊』に掲載された記事の整理を行った。

二 梶山今子研究について

今子夫人に関する論述は皆無といってよい状況である。貴重な記述の一つが、『私学人梶山正式²³』中の「夜明け前」の章の高砂や！（ご成婚）Ⅱ 錦の帰京、を中心とする箇所、経歴、出身、親族の紹介、本人の志等について触れてある。その中で、出身の中村家が今子夫人

の遊学を支援したこと、さらに姉上のご縁先も学校の設立・発展にあたって物心両面から惜しみない援助をされたことが明らかにされている。何より今子夫人の存在について、「今子先生はご上京の前は岐阜女子師範ご出身でもあつて教育畑に育つた方、梶山経営にあたつては夫正式先生と共に親しく教壇にも立たれたのである。(中略)また日々の教科外には寮母として文字通り母親に代わつて多くの寮生を預かり、正式先生とは琴瑟相和して学園の発展にお尽くし下さつたことは梶山を識る人の等しく崇敬するところである」と述べられているように、裁縫科の教員として、また寮母として生活全般の指導にあたられるなど、創設期の学校の基盤作りに大いに貢献されたことが分かる。しかしながらそれ以上の業績については扱われていない。

西脇明美は「岐阜県における女子中等教育事情の一考察」において、明治初期の岐阜県の女子教育の実情について考察している。特に県内の女学校不在期間(明治二十年から明治三十三年まで)に好学の女子が京都、東京、愛知とそれぞれの地の学校を求めて遊学した者について追跡している。その内、東京の「東京裁縫女学校」で学び、東海地区に女学校を創立した六人の一人として今子夫人を挙げている。以下引用すると、

梶山正式・梶山今子

正式は明治十二年生まれ。武儀郡上有知村(現、美濃市)出身。小学校教員、「県教育界誌」編集員を経て上京。男性である

ため特例として同校への入学を許可され、同三十八年卒業。その後同窓の中村今子(加茂郡加治田村出身)と結婚。相携えて帰郷し、同三十八年に「名古屋裁縫女学校」(現、梶山女学園)を名古屋市に開校。

とある。「東京裁縫女学校」の開設者渡邊辰五郎の人間性育成にまで視点を持つ裁縫教育の教育理念や目的、方法を具現化した一人として押さえている。

三 『糸櫻』、『糸菊』について

本稿で資料の検証対象として取り上げる『糸櫻』、『糸菊』は本学園の機関誌である。「梶山歴史文化館ガイド」によれば、『糸菊』は、百年を越えて学園の歴史を記録し続けている学園発行の年誌である。現在の年誌名『糸菊』の前身は『糸櫻』といい、本学園開校の翌年明治三十九(一九〇六)年に第一号が当時の教職員、生徒、卒業生で構成された「和風会」によって発行された。その名の由来は、学園内のしだれ桜(糸櫻)と裁縫に欠かせない糸にちなんで付けられたという。

これが『糸菊』へと改名されたのは大正二(一九一三)年であり、その理由は大正天皇と皇太后が名古屋に宿泊された折り、本校生徒が献上した「糸菊の手芸の造花」がきっかけだそう。昭和十九(一九四四)年から昭和二十三(一九四八)年の間は戦争のため休刊し、復刊

後は毎年刊行され現在に至っている。

現在はA5判二百数十頁ほどの構成で、毎号、表紙絵に生徒・学生の作品（絵画）を取り上げているのが特徴である。内容は巻頭言、特集、説苑、学園を構成する各学校、学園、事務局、同窓会、学園データなど多岐に渡り、学園活動の一年を紹介し、統括する年誌となっている。毎年度各機関代表者による編集委員会が構成され、編集委員会事務局（委員長は学園事務局長、企画広報課）の手で、編集・発行されている。平成二十六年年度に関しては発行部数二一、六〇〇部。配布先は、全教職員、旧教職員（退職後十年間）、全学生・生徒・児童・園児、同窓会関係者である。

四 資料『糸櫻』『糸菊』に掲載された梶山今子に関する関係記事

梶山歴史文化館に所蔵されている『糸櫻』『糸菊』における梶山今子先生の文は、学校創設後の明治三十九年と明治四十年に集中して掲載されており、それ以降には見当たらない。記事は論説、裁縫、詩歌、生徒の文から成り、女子教育、女子の職業教育に関する今子先生の識見、裁縫の授業内容や方法、専門知識、折り折りの所感（詩・歌）などである。今子先生に触れた生徒の記録や日記文からは、先生のお人柄や指導の様子がうかがえる。（なお、以下の資料は間違いと思われる箇所も含めてできるだけ原文のまま紹介した）

今子先生の文

會員諸君に望む

梶山今子

光陰矢の如し、日往き月來り、我校開設以來早や一年に垂なむとし、卒業生もやう／＼に出で來ぬ、香り床しき梅の花の盛りの頃、紀元節てふこの目出度大佳節に於て、同窓の交誼を温むる機關雜誌「糸櫻」はいよく／＼發刊する事とはなりぬ、されば何か一ことのしたく思ひはべれど、もとよりいと拙き身にて、文かく道も知らず又世の理もわきまへず、殊に事繁き身にて筆とる暇もなければ、只ひとことをのみ書き記し置かんとす、開け行く御代に生れ給ひし諸嬢こそ實に幸福なれ、日々技術を練磨し學びの道にいそしみ給ふは世の爲め國の爲めよろこばしき限りぞかし。

近頃の女子の有様を見るに少しく、もの學びしたらん人は、多く一生を獨り身にて過ぎん事を思ひ、あるは男女同權を口にし、其性のたがふも忘れて、男子と同じ事をつかさどらんことをねがひ、女子に似氣なき行をも、敢てなし、以て得々たるもの多きはかへす／＼すもなげかはしき事にあらずや、凡そ女子たるものは柔順温和にして何事もあら／＼しき行ある事なく家にありてはよろづまめやかに、父母につかへ嫁しては舅姑を敬ひ、夫をたすけ、よく家をとゝのへ、よくその子を教へ育つるをこそ女子の本分とは云ふべけれ、我親愛なる會員諸嬢幸にます／＼つとめいそしみ、その學び得たる所をよく活用し、家をとゝのへ世を益し、以て女子としての本分を完うせられんことを望む

(糸櫻 第巻號 明治三十九年二月十一日發行 論説)

婦人と職業

梶山 今子

近來我邦にも女子の職業教育が、大層勃興いたしまして東部に於ける幾萬の女學生中職業教育を以て目的とせる各種の技藝學校に通學せるものが、最も多きを占めつゝあるといふことは、大に注意すべきことであります、凡そ人間は資産のある人も無い人も貴い人も賤しい人も苟も世に生れ出でたる以上は、義務として夫れ相應に職業を営まなければなりません、職業は唯だ衣食の資を得る爲に必要なのではない、又單に收入を多くして財を増殖せしむるために營むのではありません、若し唯だ衣食を求むるが爲に職業を要するとか又單に財を増殖せしむるのが職業の目的であるのならば資産のあるものや資産の増殖を希はぬものは無職を當然とする譯であります、人の職業には是等の目的以外に實に貴い意味を持て居るものであります

試に近郊に杖を曳いて四方の田園の景色を眺めて御覽なさい、我々の同胞が鋤を取り鋤を手にして如何に孜々として其業を執つて居るか、朝は星を戴いて出で夕は月を踏んで歸りてもなほ且つ足れりとせず、夜は更に家に在りて他の仕事に従事するといふ有様であります。之を見て我々が獨り終日何の爲すこともなく飽食暖衣貴重光陰を徒費して、どうして心に愧ぢずに居られませうか我々が毎日用ふる器具調度は一つとして多くの人々の額に汗して作られないものはない、然るに自分獨り何等社會に貢獻することなく空しく之を消費してどうして忍

びざるの感が起らずに居られませうか、たとひ家に多大の資産があるとしても今日衣食に窮しないからといつても無職であつたならば、社會國家に對して何の面目がございませう、されば人は貴賤貧富に依らず必ず相應の職を求めて之に従事しなければなりません

我邦古來勞働を卑しむ風習がありまして婦女子などの家庭に在りて内職すること等を愧ぢる様な習慣がございまして中流以上の家に生れたる女子等は何等の技能を持たないものが多いといふのは如何にも悲しいことであります、どうか斯ういふ風習を一日も早く打破したいものであります

然して右の如き陋習を一日も早く打破すると同時に我邦中流以上の婦人に適應せる職業を開拓せることは今日の急務であります、裁縫、造花、編物、刺繡等が近來大に發達普及して之等の要求に應ぜんとしつゝあることは最も慶ぶべきことであります、併しながら是等諸種の技藝に關してはなほ研究の餘地が甚だ多いのでありますからどうか諸嬢と供に今後益々研究して大に婦人の職業を開拓^(拓)し世の爲め國の爲めにいさゝかなりとも貢獻したいことゝ存じます

(糸櫻 第参號 明治三十九年十一月發行 論説)

糸櫻第三號發刊に臨みて

梶山 今子

志あひたらむ友どち打つどひて、野に遊び山に登るは樂しきことなり、されど獨り居て文机に打むかひ、書讀む亦いとうれし、家の中に居ても、世界の事を知り、萬の事の理りを悟り、千早や振る神代の昔

(五)

(六)

の事を知り得て、書籍を友とするほどのしく益多きはあらかし、殊に同じ教の庭同じ學びの窓に朝な夕な苦樂をともしせし、諸嬢等のものせられたる文どもいと多く蒐めて編めるこの糸櫻こそ、讀む度毎に昔の友の忍ばれて此上もなき好記念なれ、糸櫻は號を追ひてます／＼善きに改められ、なほ幾千代かけて榮え往かむとす、親愛なる會員諸嬢等業卒へたまひてやがて家庭に歸られなば、なすべき事も繁からむ、されど年に三度發刊の糸櫻其號毎に、嬢等が消息を誌上に洩して舊友を温め新しき友をも迎へたまへかし、是れ我が切望に絶へざる所なり。

(糸櫻 第參號 明治三十九年十一月發行 論說)

理想

梶山 今子

今度本會で吾が理想といふ懸賞論文が募られましたが應じたる人は僅かに數人に過ぎなかつたそうであります、が皆さんは理想がないのか果た又御遠慮なすつたのか私は皆さんには夫れ相應に理想を持つていらつしやることを信じます品性を修養するには種々なる方法がございますが第一に必要なことは現在の状態よりも更に一步進んだ状態に立ち至らんとする念を持つことが肝要でございます苟も品性を修養せんと欲するものは常に心に反省して自己の欠点を知り短所を認め努めて之を改め之を矯正して行き良好完美の域に達せんことを求めなければなりません若し現在の状態を以て満足し自分の行爲を以て非難すべき点はないものだと思つて何等の改善進歩を企てなかつたらば品性の修養は遂に期することは出来ないと思ひます

斯く現在の状態に甘んぜず更に良好の域に進まう完美の点に達しようと望むのをば之を名けて理想と申します理想は實に吾人を導く標準でございます吾々はこの理想があつてこそ日々慰藉を與へられ獎勵を加へられ奮發心も出来るのであつて若し何等の理想もなかつたらば徒に慾望本能等に支配せられ高尚なる品性を修養する等のことは望み難きは勿論頗る意味なき生活を營むことになるのでありませう理想は須く高いが良いと存じます併しながら徒らに高きに失して空想となつてはなりません吾々の理想は他日必ず實現せらるべき希望あるものでなければなりません而してその理想に向て之に到達せんとして奮勵するのであります古今の烈女傳を讀みてはその人と爲りを景仰し淑徳ある婦人を見てはその高風を欽慕し常に心を用ひて己れの人格を完全の域に進め己の持てる理想をして空想に終らしむることなく必ず之を實現せしむるやうにしなければなりません斯の如く人々互に人格を完成して社會の福祉安寧を得るに至らば是れ實に善美の極度であつて人間最終の目的であります

(糸櫻 第貳卷第貳號 明治四十年六月二十日發行 論說)

十二單に就て

梶山 今子

衣服のお話に就ては既に諸先生方の御高説が書籍や雑誌などに掲載せられて居りますから皆様もよく御承知で御座いませうが十二單の事に就て唯記憶に存する所を臚列して御參考に供しようと思ひます

十二單とは單、内着、五ッ衣、(即ち五枚)表着、唐衣裳、掛帶、緋

の袴の總稱でありまして斯様に十二重^{（七）}子^{（八）}るから十二單と申しまするので御座います其地質は單は緋の精好又は白精好、内着、五ッ衣、表着、唐衣等は表は上等になると定紋を織り出して色は一定して居りませんで其人の年齢又は好みによつて様々のがあります裳は白精好にて典侍は桐に鳳凰の模様を畫きそれ以下は桐に鳳凰のみでは用ひられぬ故竹を畫くとか又は波に松などの模様を畫くのであります緋の袴の地質は表は緋の精好又は緋の羽二重にて裏はナオリ紅^{（九）}絹^{（一〇）}を用ひます此を着する順序は始に白の襦袢を着て次に白小袖を着し幅二寸五分丈一丈位の白羽二重の帶を締めます此時の白小袖の地質は白羽二重又は白倫子等にて期節により一枚着る事も二枚着ることもあります次に緋の袴を着け紐は右にて結び次に單内着五ッ衣、表着、都合八枚は衿を一そくに合せて着し其上に唐衣を着け次に後に裳を着け裳の引帶は後に結んでおきます又足には襪^{（一一）}（靴の下に着する足袋なり）を履き緋の精好に製したる花杓を履くまた檜扇を手を持ち懷中には帖紙^{（一二）}を入れておくのであります昔は此十二單は武家などでは用ひることが出来ませんでした但し徳川家にては十四代目の時（文久元年）今の天皇陛下^{（一三）}の叔母君にあたらせらるゝ御方が御腰入れ遊ばしてより徳川の大奥にては十二單を着する格式になつたとの事であります然るを明治十七年伊藤博文侯總理大臣となるや我國男女の制服を定め十二單は勅任官以上の婦人の禮服となりましたから今は其の家長が勅任官ならば其夫人並に令嬢等は十二單を着る事が出来るようになったのでありますされど此十二單などを一通り調製せんとせば中々多額の金子を要する

のみならず動作にも不自由でありますから代りに洋服を用ふる方が萬事に就て經濟であり升

表着仕立寸法

袖丈二尺 袖巾一尺 袖口の衽二分にて濶袖 袖付九寸五分 身丈四尺六寸五分 行二尺二分 衿肩三寸五分裁切 身八ッ口六寸 衽下り三寸五分 袴下二尺八寸 衿巾表三寸六分にて裏衿を表に二分フカス 身幅^{（一四）}前後一尺二分 抱巾七寸五分 衽巾六寸五分 相袴中五寸

五ッ衣

袖丈は上着よりも三分つめ袖巾は同様にいたします 身丈は四尺七寸五分にて五枚共一分づゝつめます袴下二尺九寸にて衿丈は表着と同様であります行丈及び衽は表着と同様であります

内着の寸法

身巾行及び衽等凡べて五ッ衣と同様に唯身丈を一寸長くいたします袴下三尺にて衿丈は五ッ衣と合ふやうに致します

單衣の寸法

袖巾は内着よりも一寸廣く袖丈は三分詰めます

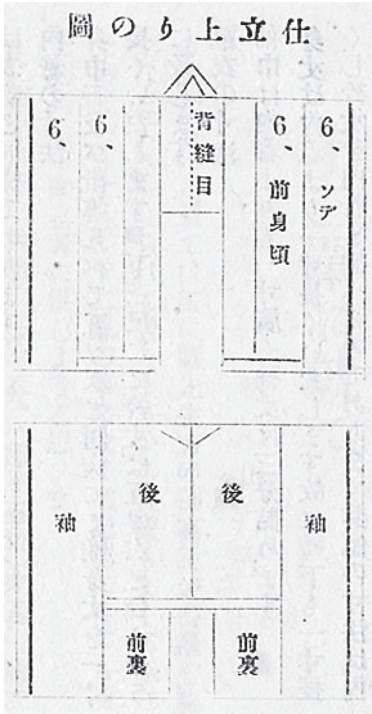
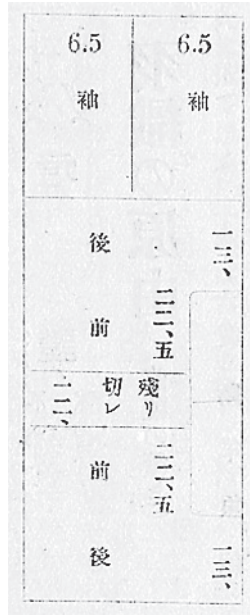
身丈は内着より一寸長くいたします故に袴下も一寸長くし衿丈を内着と揃へるのであります其他の寸法は内着と同様であります而して此れは裏の付かぬものですから袖口袴下衿先口などは皆捻絢に致します

（以上の裁方は普通衣服と同様なれば略す又縫方も表着、内着、五ッ衣、等は衿の縫方と同様なれば略す）

唐衣を仕立つる寸法

(八)

後丈一尺二寸五分 前丈二尺二寸前丈は袖丈と同様でありますから實地に仕立つる時は表着の袖丈よりも三分長くするのであります
後巾一尺 前巾六寸 袖巾六寸 袖口は潤袖にて袖口裾口及衿先など裏を表に二分づゝふかせます
衿巾二寸五分 袖付は身丈残らず付けます



巾一尺三寸長さ一丈三尺八寸の布を以て唐衣の裁方縫方は衿にて背は

四つ縫にして左右に開いて細く衿けます袖下も返し縫に（四つ縫）前後に開いて細く衿けておきます衿を付けるには表に縫目を出して四つ縫に付けます（以下次號）

（糸櫻 第貳卷第參號 明治四十年七月二十四日發行 論説）

無垢比翼

注意 裁方綜合圖は衣服裁方圖解前編にあれば参照せらるべし

梶山今子

裁切寸法

袖丈一尺七寸、ハッ切一尺三寸、袖口切一尺五寸、身丈四尺、表裾丈一尺三寸、裏裾丈一尺五寸、表豎裾二尺五寸、裏豎裾二尺七寸、衿先五寸、

積方

袖丈 袖用布 身丈 衿下
 $17 \times 4 = 68$ $40 \times 6 - (5.5 \times 2) = 229$
身丈 衿下 衿地 袖用布 表用布
 $40 - 5.5 \times 2 = 69$ $229 + 68 = 297$
裏裾丈布敷 裏裾用布 下着表裾丈 表裾用布
 $15 \times 8 = 120$ $13 \times 4 = 52$
表用布 裏裾用布 表裾用布 衿丈 裏豎裾
 $297 + 123 + 52 + 50 + (27 \times 2) + 13 +$
袖口切 衿先 總用布
 $(15 \times 2) + 5 \times 3 = 634$

積方

袖丈一尺七寸を四倍し之を袖の用布とす、身丈四尺を六倍し其内より衿下り五寸五分の二倍を減じたる者に袖の用布六尺八寸を加ふれば二

方 テ 裁 ノ 裏						
ハ ッ	裏	衽	同 <small>ニ 五</small>	裏 胸	同	袖
ヌ ノ	衿	先		<small>ニ 五</small>		
13.	45.	115.				

ハ ッ	裏	衽	同 <small>ニ 五</small>	胸 裏	同	袖
ヌ ノ	衿	先		<small>ニ 五</small>		
13.	45.	115.				

裁方

丈九尺七寸となる、之即ち表の用布なり、身丈四尺の内より衽下五寸五分を減じ之を二倍すれば衽衿地六尺九寸となる、表の用布に裏裾丈一尺五寸の八倍一丈二尺と、下着表裾丈一尺三寸の四倍五尺二寸とに、衽丈五尺、裏豎裾二尺七寸の二倍に、ハツ切一尺三寸と袖口切一尺五寸の二倍と衽先五寸の三倍とを加ふれば六丈三尺四寸となる之總用布なり

綜合圖中に示せる如く、總尺の内より袖丈の四倍即ち六尺八寸を裁切りて、中表に丈二ツに切りて兩袖となし、次に身頃の丈四尺を四倍したる者を取り中表に丈二ツ折になし、次に又二ツ折りて二枚の輪を左に衿肩を左の方にて手前より向に二寸五分衿肩を明け、次に衿衤地六尺七寸を裁切りて、中二ツに切りて、一方を丈二ツに切りて左右の衤となす、残りの半巾六尺九寸の内より衿丈を取り、残りを共衿となす、次に常巾にて丈一尺五寸を八枚取りて二枚分の裏裾廻しになし、次に丈一尺三寸を四枚裁切りて一枚分の表裾廻しになし次に衿丈五尺裁切りて巾二ツ割

になして一方は衿となし、残れる者を丈二ツに切りて下着表堅裾となす、次に五尺四寸裁きりて始め巾二ツにきり次に丈二ツにきりて上着下着の裏堅裾となし、次に常巾一尺五寸裁切りて巾四ツに切りて上着下着の裏袖口になし、次に二尺五寸取り巾二ツになし、一方は下着共衿とし一方の二尺五寸の布地より、尺一尺五寸裁切りて下着表袖口となし残りを丈二ツに切りて下着衿先となす、次に一尺三寸裁切りて巾四ツ割になし八ッ口切となし、残れる常巾五寸の者を巾二ツに切りて上着衿先となす

積方

袖丈	袖用布	身丈	裏袖通シ	二倍	胴縫縫代
$17 \times 4 = 68$	$40 - 15 + 2 + 2 = 29$				
胴裏丈		身丈	衿下	裏堅帯	
$29 \times 4 = 116$		$40 - 5.5 - 27 = 7.5$			
袷二倍	胴縫縫代衿先		袖用布		衿先
$1.5 + 2 + 2 = 11.5$			$68 + 116 + 11.5 +$		
八ツ切 袴丈	裏地用布				
$13 + 45 + 253.5$					

積方

袖丈一尺七寸の四倍は六尺八寸となる、身丈四尺より裏裙廻し丈一尺五寸を減じたる者に、裙の二倍二寸と胴繼縫代二寸を加ふれば胴表丈二尺九寸となる、之を四倍すれば一丈一尺六寸となる、身丈四尺より衽下り五寸五分と裏堅裙二尺七寸とを減じ其に衽の二倍と胴繼縫代二寸を加ふれば衽先一尺一寸五分となる、次に袖の用布六尺八寸と一丈一尺六寸と衽先一尺一寸五分と八ツ口切一尺三寸衿丈四尺五寸を加ふ

れば二丈五尺三寸五分となる、之れ裏の用布なり

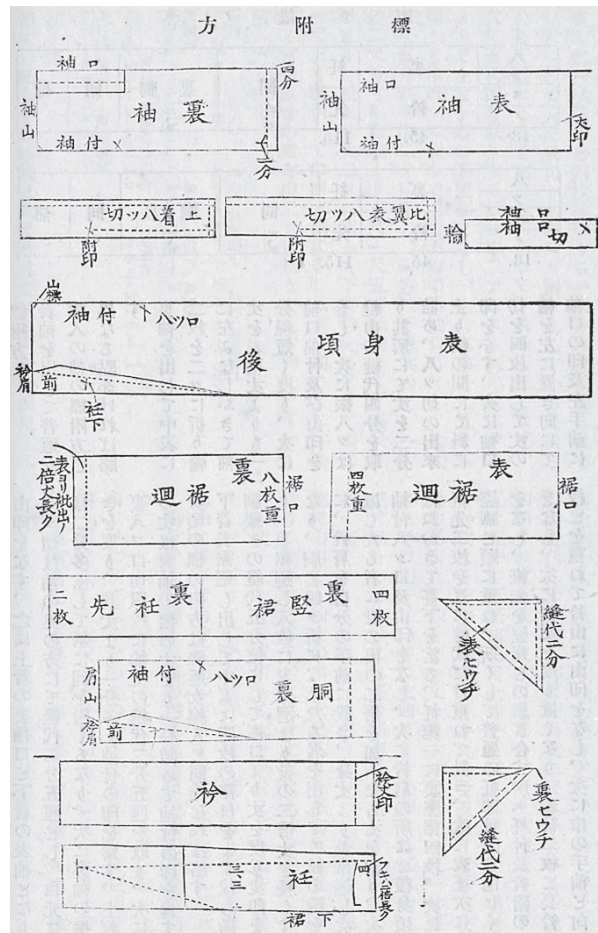
裁方

總尺の内より袖丈の四倍六尺八寸を裁切り中表二ツに切りて裏兩袖となす、次に身丈二尺九寸を四倍したる者一丈一尺六寸を裁切りて丈を中表に二ツに折り又之を二ツに折りて（即ち四折）二枚の輪の方を左になして肩山とす、衿肩を衿山の方にて手前より向に二寸五分と明け、次に残りし布の内より一尺一寸五分を裁切て中二ツに切りて衿先となす、次に四尺五寸を取り之も中二ツに切て二枚分の裏衿となし残れる一尺三寸を中四ツ割になして上着裏八ッ口切りとなす、ヒウチの切は半巾四角二枚を要す（即ち裏一枚と胴ヌキ絹一枚）

標附方

表袖を出して普通女綿入の袖の標附方と異なる點なければ略す

裏袖を出して中表に二枚を二ツに折り輪に左になしおきて袖丈を表袖丈よりも一分程短く度り、次に袖口袖付及び山印をなし、次に振八ッは縫巾の縫代四分を取り其所にて丈を二分詰め、八ッ切の出来上り幅の間にて斜に印をなす、次に袖口切を四枚出して丈の輪を左に置き向にて袖口の印及左手前に山印をなす、之は上着の裏袖口と下着の表袖となり表八ッ切は袖の奥の方にて縫代二分五厘とし、口元にては二分多くして斜に印を附くるなり、次に裏袖の振明きを度り、其丈より一



(10)

分多く袖付の印を爲す、上着の裏八ッ口切四枚に袖丈の縫代二分五厘を取り、次に振の丈は表袖の振の丈より一分詰めて袖付の印を爲す表見頃の標の附方は普通女綿入と同様なれば略す

下着表裾廻し出して中表に四枚の裾口をよく裁ち揃へ胴繼ぎの縫代五分位にして裾口より丈を度り丈印をなし、裏裾廻し八枚に表裾廻しより衽の二倍丈を長くするなり、胴裏四ッ折になしたる者を出して二枚の輪を左に、衿肩を自分の手前に置き、身丈より表裾廻し丈を減じたる

者に衤の出の二倍を加へたる丈を當り、次に袖付ハッ口及山印をなし、次に衤肩の所にて後身頃をはねおきて衤下を當る、衤第一に裏堅裾四枚、次に裏衤先二枚を互に縫代だけ重ねて置き、次に表衤次に表堅裾と順を重ね、斯くして普通の衤印付方と同じく印をなし、衤先を堅裾との繼ぎ合す所へ衤付及衤附の印をなし、次に衤衤を度り置きなり、表衤二枚と裏衤二枚とを重ねて衤山に山印をなし、次に中の手前と向ふに丈印をなすなり

縫方順序

第一に上着表袖を普通綿入着物の如く縫ひ、引返して襷を掛け、次に袖中の印を付け次に裏袖に袖口切を縫付け、袖口の方は四分の縫代になし、袖下の所にてヤッ口より二寸五分位の間に斜に縫ひ折を付け、次に下着の表袖口を口先の縫代丈裏の方に折り返し、端より端迄に襷を掛け、次に上着の裏袖口切を下着表袖口の表と上着袖口切の表と重ね、先の方にて下着の表袖口より上着裏袖口切を中四分先に出して置き、奥の方に中のじぞろを出して上着裏袖口切の山に一分の襷を取りて二枚共に縫ひ置き、次に先に縫ひたる裏袖の裏を出し、今縫ひたる裏表の袖口表の針目の出ぬ様に端より端迄針目三分位になして綴ぢ付け、次に下着の表ハッ口切と上着の裏ハッ口切の袖下を印通りに縫ひ、ハッ口切の奥を上着の裏と下着の表とを合せて二枚を縫ひ、中印を付け上着の表袖中印を裏ハッ口切の中印と合せてハッ口を袖付の印より印迄縫ひ、此の所に綿を入れて引返して襷を掛け、次に装袖の中印と下着の表ハッ口と中印を合せて上着に縫合せたる如くなし縫

ふなり、次に上着の表身頃は普通女綿入着物の如くなれば略す、次に胴裏を出して表を同じく背を縫ひ自己の向に折を返し、次に後巾肩中の印を付けて脇を縫ひ前身頃の方に折を付け、次に上着の裾裏廻しの背と脇を縫ひ、次に下着の裏表の裾廻しの背と脇を縫ひて折を付け、（但此時に後巾にて上着よりも裾口にて一分狭く胴繼ぎの所にては上着と同じ寸法に裏表共）次に下着の裏表を中表に揃へて裾口を縫ひ合せ、折は表の方に付け引返して襷を掛け、残らずの裾廻しに前巾の印を付け、下着の前巾は上着の前巾よりも裾口にて三分せまくなし、次にヒウチ切を中表になして斜の所を裏表一枚宛合せ、次に上着裏裾廻しの胴繼ぎの印の有る方にヒウチ切を前巾印より先に衤を附くる時の縫代を出し置きてヒウチを巾の有る所迄縫付け、折はヒウチの方に返し襷を掛け、次に下着の表裾廻しに表ヒウチ切を上着の裾廻しの如く縫付け、折は裾口の方に返し襷を掛けヒウチ切巾の止まり先少しの間は胴繼ぎの縫込の引つらぬ様に、衤袖口を四ッ止になす時に後袖を縫代丈を出して縫込を斜に折出す通りに胴繼ぎの縫代を折出し置き、（但下着の表裾廻しのみ）次に胴裏を残らずの裾廻しを出し胴裏の裏を手前に持ち、其次に下着の裏裾廻しの表を胴裏の表の方に置き、次に下着の表裾を置き、（裾口を合せたる者を其ま、表を出して置く）次に上着裏裾廻しを置きて胴裏の裏を手前に持ちて右の端より縫始め、ヒウチ切巾の止りの所にて四枚共に四ッ止をなし、其糸を切らずして左のヒウチ切を縫付け有る所迄縫ひ、其所にても四枚共に糸止をなし其糸を切らずし胴裏一枚と裏裾廻し一枚を縫合せ折は胴裏の方に返

し胴裏の表より端より端迄駢を掛け次に裏堅裾二尺七寸の切四枚有る内二枚丈に衽先の切を縫ひ付け之を下着の裏堅裾と定め、此の布と二尺五寸の下着表堅裾と合せ裾を縫ひかくし駢を掛け、次に下着の裾の縫目を揃へて待針を刺し、前身の表ヒウチ切の止りより縫始め、裏衽は衽先の所迄縫はずして表ヒウチ切の止りと同じ所迄縫ひ、其所にて糸止をなし其れより上は縫残し置き、裏堅衿二尺七寸の印を上着裏裾廻しに裾口よりヒウチ切の止り迄縫ひ付け、其より上は衽を身頃に附くる方の縫込を縫代丈斜に折出し置き、裾口は右に持ちて胴裏の表を手前に持ちて、第一に下着の裏衽を斜に通し、第二に胴裏に針を通し、のヒウチ切に通し、第四裏ヒウチ切と上着の裏堅裾に通し、第五下着表堅裾に通して糸止をなし堅裾切丈の有る所迄四枚共に縫ひ折を付け、次に裏衿二枚に衽先切を縫ひ付け裏衿の方に折を返し、次に上着の裏堅裾に裏衿を裾下より印の有る所迄縫付け、下着の方は裏表共衿を裾下より上着の衿先を縫附けたる所迄同じく縫付け、次に胴繼ぎの裏を手前になし裾口を右に持ち上着の裏堅裾布の縫残したる所の縫込を針に折りたるまゝ、裏衿と共に下着の表衿の間に入れ、第一に下着の表衿に針を刺し、第二に上着の裏衿と堅裾に通し、第三下着の表堅裾に通し、第四に胴裏に通して、第五に下着堅裾と裏衿に通して糸止をなし、其糸を切らずして衿三枚に胴裏一枚をはさみて下着の表衿と上着の裏袖とを胴裏の方に下着の裏衿を胴裏の表の方に當て、一方の衿先を別々に縫ひたる所迄縫ひ、其の所にも布残らず共に糸止をなして衿の方に折を付け、次に上着の表身頃と裏裾廻しと合せて裾

(二)

口を縫ひ裾へ拵へ、表の方に折を付け駢を掛け裾の所はかくし駢を掛け、次に身ヤツ口を普通に綿入の如く縫ひ、裏の方に綿を入れ裏表の身頃にて裏表の袖のハツ口を狭みて、第三表第一に身頃に針を通し、第二表袖、第三上着裏ハツ口切、第四比翼ヤツ切、第五裏袖、第六胴裏に通し六枚共に糸止をなし表袖は身頃の方を見て縫ひ、袖の方に折を付け次に裏袖を附くる時に比翼のハツ切の有る所迄四枚共に縫付け、其より上は胴裏と裏袖二枚にて縫い身頃の方に折を付け次に上下着共表堅裾に駢を掛け次に上下裏表残らず衿中の印をなして綿に入る、なり

綿の入方

上着は普通綿入の如く入れ、下着は口綿入になして上着に綿を入れたる後スソ口より引込むなり

紵方

第一に比翼袖口明より下を縫はずに有る故、袖口を紵ける糸にて袖口中丈けの有る所迄比翼の表と上着の裏袖に巾を別々に紵け、其糸を切らずして袂の角迄堅綴をなし、次に衿先を縫ひ折を裏に返して綴じ付け、其糸にて衿先を別々に縫ひたる所を裏表綴し付け、其れより上は裏表一所に綴じ付け、(但綴糸上着の裏衿の表と下着の表衿の表との間に見へぬ様に綴じ附くるなり次に上下共衿を紵け、次に二枚の裾綴をなし其れより堅綴を胴繼ぎの所迄なし、次に上着下着の裾下を紵くるなり(但下着に綿に入るなり)

(糸櫻 第式巻第六號 明治四十年十二月二十五日発行 裁縫)

今子先生の詩歌

糸櫻

幾年をふるやの庭のいとさくら

梶山 今子

人に知らるゝ春は來にけり

(糸櫻 第壹號 明治三十九年二月十一日発行 文苑)

勉學

學のみちは多けれど

をうなの業の初には

縫針をこそ知べけれ

毛糸細工やつくり花

梶山 今子

茶の湯いけ花讀み書も

やがて業卒へ歸りなば

良妻賢母とあふがれて

する頼もしき乙女子ら

(糸櫻 第貳號 明治三十九年〔発行月日不明〕 寄書)

河骨

廣口にいけしかはほね水あけのそのつたへこそ知らまほしけれ

梶山 今子

(糸櫻 第參號 明治三十九年十一月発行 文苑)

螢(三首)

梶山 今子

かけくらくしける庭のくさむらにすたくひかりは螢なりけり
たちぬひに心をこめしをとめこのかへり見すれば飛螢かな
わかたけのうへにすゝしき露見えて螢とひかふ夕まぐれかな

(糸櫻 第貳卷第貳號 明治四十年六月二十日発行 清風緑蔭)

今子先生に触れた、生徒の文

我樂しき寄宿舎生活

伊藤 順子

朝まだき夜も明けやらで四隣尚ほ寂として聲なく舎内幾十の電燈獨り
空しく皎々として輝ける時忽ち鳴り響く起床の點鈴に舎生四十餘名は
一時に夢を破り蹶起すれば早や當番の者はそれぐ井戸端に米を磨ぐ
もの勝手に茶碗を洗ふもの、竈に火を炊くもの、香物を切るもの、飯
を盛るもの、戸外を掃除するもの、室内に雑巾を掛くるもの皆何れも
忠實にその任務に服せり、嗚呼是れ本校の寄宿舎内早朝に於ける光景
ならずや

思へば過ぐる二月の九日なりき寄宿舎制度に大改正行はれて女中を
全廢し庖厨、洒掃、應接等の事を悉く舎生自ら執ることになり先づ
舎生全体を六組に分ち之に松、梅、櫻、藤、紅葉、菊の名を附し
各交代にその務に服すること、なし其夜は皆櫛を作るものあり
西洋前掛を縫ふもありそれぐ勇しく準備をなす
翌日は吾等(松の組)が炊事の當番なりき五時半に起き出で厨に出づ

れば既に舎監今子先生來給へり、次で校長先生も來給へり、それより庖厨の事に從へり初めの程はやゝその困難を覺ゆるものありしが校長先生今子先生が親しく吾々と勞を俱にせらるゝに勵まされて遂には寧ろ楽しく嬉しくその任に當るに至れり

六時半頃凡ての掃除も済み食事の用意整へば再び點鈴鳴り響きて一同食堂に集り朝禮を終り茲に敬愛なる寄宿舎の父母即ち校長先生並に同夫人及親愛なる姉妹五十名家庭の春風長閑に吹き渡れる下に愉快なる筈を取る

食事終れば再び食器を洗滌し晝食の用意をなす「チヨイト飯田さんお豆腐を買て來て下さいよ」「あゝ私が往つて参りますよ」などの聲があちらで聞ゆると思へば此方には「これはドウして煮るのですか」と昨年まだ高等小學校を卒業せる某嬢が問へるなりき、斯くて八時半の晝食の準備を終りて飯を櫃に移して毛布に包みその冷ゆるを防ぎ置き一同今日の課業を受くべく教室に行く

晝食の時は放課より十分前食堂に來りて準備をなし點鈴と共に朝食の如く一同打揃ひて食事を終る

午後三時過ぎは夕食の仕度に取り掛り兼ねて明日の材料を調へ置く、五時夕食の準備整ひ又々一同食事を終り後食器を洗ひ明朝の仕度をなし之にて當番の任務を終れるなり

毎週土曜日の夜は舎生一同の茶話會あり、初めに金剛石の歌を合唱し次で楽しい茶話會に移るが例なり往々舎生の滑稽なる餘興、趣味ある談話、唱歌の合唱、校長先生の有益なる談話あり

平日は六時三十分より八時まで黙讀の時間にして九時に夕禮を終りて一同寢に就く斯くて五十名の大家庭は平和に楽しく暮らしつゝあり嗚呼楽しい寄宿舎生活!!!

(糸櫻 第貳卷第七號 明治四十一年二月二七日発行 雜録)

九月 晚餐會日記

寄宿舎第一室 S S 生

午前五時半に起床の鈴と共に床を起き出で、見たらビショ／＼と雨が降つて居る、「山田さん今日は雨降りよ、日曜日ですから何處かへ行こうと言つて居たか此れでは何處へも行けそうもないわ」といふと、山田さんが「今日私等は晚餐會のお當番じやなくつて」と尋ねられたので、私は「あゝそう／＼私すっかり忘れて居たワ、ぢや此れから仕度をしませうよ。今日は貴女に私に、三宅さんに、赤塚さんに、細江さんに、夫れから、まだお一人と、六人でしたね」と、自分ながらも、あまり忘れッぽいのに、あきれてしまった。それから襷を取るやら、前掛けをかけるやらして、兎角して居る間に、晝飯も過ぎ二時となつた。今子先生がモー割烹にとりかゝつて下さい、と言はれましたので、勇んで炊事場へ行きました。最初先づ今子先生から、今日の献立は汁(鶏肉と)と皿付(いんげん豆)と、香物とであることを指示せられました斯くて先生の指揮の下に、玉葱を細かく刻み始めましたが、香が眼に浸みて、涙がポロリ／＼と出て來るので、息をもしないで、顔をしかめて切つて居りましたすると皆さんが、その顔が如何にも可笑しいとて腹をかゝへていらつしやいました。それから、甘薯の煮たの

を摺鉢に入れて、摺り始めたのですが、なか／＼うまく摺れぬので、細江さんが、眞赤な顔をして一生懸命になつて、摺つていらつしやるので、可笑しいやら、お氣の毒やらでありました。

その内に、用意も調つたので、調理せしものを晩餐會場に運びました、晩餐會場は、例の娛樂室でありまして、廿八疊敷の廣間であります、此處に圓形に食卓を並べ、白布を以て之を蔽ひ、十數個の美麗なる造花を所々に飾り、天井の中央より、四方に萬國々旗を懸吊して、裝飾も十分に行き届いた積りであります。此處に食器を配置して一切の用意も整ひました。

やがて開會の點鈴がチリン／＼と、如何にも喜しさうに鳴り渡りました。斯くて校長先生、御老父母様を始め、五十餘名の舍生は、悉くその席に列りました。見ると、どの人も／＼、嬉しそうに、ニコ／＼として和風駘蕩の有様でありました。それから先生の御挨拶と共に、一同は箸を取りまして、楽しく睦しき一家團圓の晩餐會は始まりました。私等當番のもの六名はお給仕に出たのですが、之まで斯様な多くの方々のお給仕をした事はないので、眼の廻るほど大急がしでありました、斯くて三十分間ほど經ちまして、晩餐會も終りました。而して再び先生の御挨拶がありまして、茲に閉會いたしました。

之れより私共は、電燈輝く下に、今日の有様を語りつゝ、食事をして居りますと、某室の某さんが、「今日は御苦勞様でした、大變においしい御馳走だつたは」と言はれたので、赤塚さんが「あなたお上手をおつしやることね」等と笑ひました。あ、今日は本統に楽しかつたこ

の樂しみは永久に忘れません。

竹香評 眞に名古屋裁縫女學校の一特色

九月晩餐會日記

寄宿舎第二室 日記の係り

本校の寄宿舎には、毎月二回の晩餐會があつて、その日は、當番の舍生數名が、割烹の習練を兼ねて、舍生全体を招待することになつて居ります。

今日は第二室の私共六名が、當番でありました。午后二時より例により、今子先生指揮の下に、支度にかゝりました、本日の献立は、吸物(鰻菜の味噌吸物)揚物(甘薯の饅頭)、香物といふのでありました。それから各手分けをして取りかゝりました。甘薯を井端に運んで、洗桶で洗つて居ますと、滑稽な鈴木さんが、之は圓形式よと、おつしやるので、私はさかさず、一つを取り出で、之は凹凸式よと言へば、山本さんが、又一つを取り出で、眞面目に之は橢圓式よ、とおつしやるので、果ては大笑ひをして居ますと、あちらでは、今子先生が、揚物をしていらつしやる。鈴木さんと落合さんが、巧みに白味噌を擦ていらつしやるので、「大層お上手ね」と言ふと鉢が動搖して困るはとのお答へでした。それから、私共は會場の裝飾に取りかゝりました。會場は例の娛樂室であります、之だけでは、五十餘名の客を招待するには、手狭でありますから、一室の方にお願ひして、ズート取り拂つて、二十八疊敷の大廣間を造りました。それから十數脚の卓を列べ白布を敷き、造花萬國々旗を眼ばゆきばかりに飾りました。併し何時も裝飾の

有様が、千偏一律なので、校長先生に御依頼して、御工夫を伺ひましたが、先生は「あなた方が當番ですから、まあ出来るだけ自分で工夫して御覽なさい、後で批評はして上げませう」との事で、それから如何にしたら客人を喜ばせることが出来るでせうと、言つて額を集めて工夫を凝らしましたが、どうもよい思附きも浮びませんでした。兎角する内に、追々に時間も切迫して來たので、己むなくそのまゝ開會いたしました。

例の如く、校長先生、御老父母上様を初め、五十八名一同に席に著ぎますと、先生から御挨拶がありました。皆あふるゝばかりの笑顔にて、愉快に終りました。閉會したは午后六時半で。さしに盛大な會場も、一時に潮の引いた様で之を片付ける時は、獨り電燈のみ皎々として、淋しげに輝いて居りました。

竹香評 名古屋裁縫女學校の晚餐會には余も一度招待せられて其の實況をしりたし兎角乾燥無味なり勝の寄宿舎生徒には最も趣味あることなるべし

寄宿舎の昨今

黒川 まつ

寄宿舎生活ほど愉快なものはありません、昨今本校の寄宿舎は五十九名の舎生が居りまして、之れが監督は校長先生、並に今子先生、御自身がなさつていらつしやいます。舎生の室は、七室に分れて居りまして、固より寄宿舎にする目的で建てた家ではございませんから、随分不便の点もありますが、その代り極めて家庭的で、食事の際等はいつでも、校長先生等御二方と御一所にいたします、私共は朝五時三十分

に起床し、それより當番のものは掃除、盆栽の手入、雑巾掛等を終りまして、全六時に朝食をなし、暫く豫習を致します次に七時四十五分用意の點鈴が鳴りますと、皆々教室に出でます。授業は午前八時に始まりまして三時に終ります。夫れからは、思ひ／＼に用を達し、或は娛樂室でピンポンをなし、或は雑談に耽り、或は復習をなして日の暮れるの忘れて居るのが常であります、夜は七時より八時まで一時間習字のお稽古があります。點茶等を習ふものは、一週間に二回隨意に習ふのであります。就寢は九時であります、それより十五分前に用意の點鈴が鳴りますと、舎生一同は、一列に座して、先生をお待ち申し居ります。やがて校長先生がお出でになりますと、一同禮をいたしまして、徐かに床を取つて、寢に就きます。

毎土曜日の晩には、舎生一同の茶話會が開かれます、本月の二日の夜でした、例の茶話會が開かれました、その日の當番は、第六室の川松、近藤、三輪、等の諸嬢でありました。八時頃、點鈴が鳴り響きましたので會場は何所ですかと、尋ねると、今晚は北校舎の二階です、といはれたので、不思議なところだと思つて往つて見ますと、どうでせう階段の上の踏場には、机の四脚に紙を張つて、大きな行燈をともし之に筆太に寄宿舎生觀月會といふ文字が記されてあるのです。夫れから會場に行くと、机が二十脚ばかり、東西に一直線に列べられて、所々に小さき行燈が數個配置せられてある。夫れが如何にも滑稽に、又風流に、その頓智のよいのに一驚を吃しました。暫くすると當番の總代近藤さんから、開會の挨拶がありまして、次に校長先生から丁度

大神宮御遷宮の御時刻であるからとて、一同起立を命ぜられました。それから恭しく君が代の唱歌を合唱いたしましたて、次で南方に向て、最敬禮を行いました。その後數名の舎生の五分間演説を聞き、四季の月の唱歌の合唱などをいたしましたして、その間茶を喫し、愉快を盡して、同九時半に散會いたしました。嗚呼楽しい寄宿舎生活、私は、卒業の期も近づいて居るが、寄宿舎を離れることは、何たか名残り惜しくて、堪りません、どうかせめてもう一年居りたいと思ひます。

(糸櫻 第參卷第貳号 明治四十二年十月廿七日發行 漫録)

母校の近況

(篠村そよ稿)

木々のもみぢも散り失せて、今年も早や、餘日少く押し迫り、何となう心忙しい時節になつて參りました、御なつかしい姉上皆様方には、お障りもあらせられず、お達者で迎年の御支度の御事と賀し上げます。

去年の暮に本會より天覽紀念の白菊雜誌が発行致されましたでございませう、あの時母校の有様をくはしくお話がございましたから、例により本年も御報告申し上げます。

我が母校は本年に於て著しく發展いたしました、只今其あらましを申し上げませう。最早御存じでもございませうが、先づ外觀上大變化をいたしましたのは校舎でございます、御姉上様等も御承知の通り此ゆかしき學の庭には、所せきまで、教へ草がどし／＼茂り、只今では三百三十名の在學生がございます、尙ほ益々入學志願者が激増いたしま

すので到底收容し切れず、遂に本年八月新しい校舎を増築致されました。

此新校舎は門を中心に北校舎より南校舎へ建て連ねられ、廊下も新しく校舎に沿うて出来、東西南北、階上階下自由自在に通行の出来る様になり誠に都合よく相成りました、而して其新しい校舎の前庭、後庭には卒業生諸姉の紀念樹が亭々として絶えず緑したゝるばかりに榮えて居ります。職員室も新校舎のあかるい廣々とした所へ移されました。

來賓室は特にうつくしく出来上り西洋式に椅子、テーブル、長椅子、ストーブ等が配置よく整頓せられてあります、こゝには校長先生恩師渡邊辰五郎先生並に令夫人の寫眞が掲載せられてあります。

割烹室も新に設けられ器具もよく整頓せられ、誠に便利くなりました。

階上には、生徒製作品並に參考品の陳列室が新に設けられ、一ヶ月毎に陳列品が變る事になつてゐます、今月もやはり、紅葉や摘み細工、袋物或は裁縫の部分などが、とり／＼に配合よく並べられてあります、本年三月師範科二部を御卒業遊された諸姉の比翼の袖も美しく陳列されてあります。

個人の事業でかやうに設備が出来、この學び舎が年々いやましに榮えつゝあるは、申すまでもなく、愛知縣下を初め岐阜、三重、長野、静岡遠くは九州北海道までも散在して、家事に従ひ或は教鞭をとられつゝある一千餘名の卒業生諸姉が極めて好成绩であり隨て本校が世間

に信用の厚いことを證明してゐることゝ信じます。

斯くの如き諸姉を澤山世にあげられました校長先生始め諸先生はいかばかりの御喜びとも量り知られませんが、否數ならぬ私共さへもそろに肩身が廣いやうな心地が致しまして實に嬉しくなりません。

次に姉上様方の最もお慕ひ遊ばされつゝある諸先生の御機嫌を報じませう。

校長先生は相變らず御健かに。いと懇に御教鞭をお執り下さいまして修身や國語をお授け下さいます、教へ子は皆興味ありとて喜んでこの時間の來るのを待つてゐます。

市川先生もお變りあらせられず、御深切にいつもニコヤカに數學、地理、歴史等を熱心にお授け下さいます。

松田先生も相變らずお達者でいつも體操場では元氣よく、右向け左向けの御聲勇ましく或時は優美なるスケーティング、ヒールエンドト、カドリール、タンツライン等の遊戲規律正しく御教授下さいます。

音楽室のあるじ君とも申すべきは、高橋先生でございます、オルガンやヴァイオリンを以つて極めて巧みに高く低く或は強く弱く高尚なる唱歌優美なる音楽を熱心に御教授くださいます。

今子先生も御同様極々御壯健で相變らずお優しい御方でゐられれます、いつも人々には女の鏡と仰がれ、私共を誘掖せらるゝこと實の子の如く、諸姉も御存じの通り常に愛情をこめて、針の道ふかく導いて下さいます、今年も本科三年をお受持。

伊藤先生も御變りあらせられず、何事につけても、萬事お心ぞへ下さ

いまして、いと御深切に丁寧にお教へ下さいます只今は師範科一部を御擔任で、其かはら日を定めて點茶をも御指導下さいます。

吉田先生も相變らずお優しいお顔で、寒暑をも厭はせられず、よく御深切に導いて下さいますお受持は本科二年の乙組でございます。

河島先生は丁度去年の今頃御病氣御療養中中ございましたが早速御全快遊され、大層お丈夫におなりなさいました、本年は本科一學年の乙組をお受持でございます。

森井先生も相變らず御壯健で御深切に御教授下さいます、只今は本科の甲組の御主任でございます。

江本先生も御無事で、毎日本科一學年甲組のかはゆひ生徒を御深切に導いて下さいます。

小林先生も御變りなう朝早くから夕方おそくまで熱心に眞心こめて快活に御教授下さいますので皆々お慕ひ申して居ります、本年も師範科二部と高等師範科とを御擔任でございます。

新しい校舎の階上には横倉先生が、いつも御機嫌よく實にくに御深切に導いて下さいます、本年も速成科をお受け持ちでございます。

磯山先生は本年の夏頃御病氣で、轉地御療養なすつてゐらつしやいましたが、早や御全快遊して相變らず御深切に修身や家政學を御教授下さいます。

志水先生も不相變御壯健で學殖豊富又と得難い先生と皆々畏敬し先生の御講義を待ち兼ねて居ります、先生は教育學を御教授下さるのであります。

木村先生も御勇健でいつも土曜日には汚點拔法や、色揚げの方法をお教へ下さいます。

田中先生も相變らず御深切に丁寧に圖書を御教授下さいます。

寛先生も相變らず御壯健で熱心に插花をお教授下さいます。

新しく設けられた割烹室では、いつも國欠先生が御料理や簡單なお菓子の製法をお授け下さいます。

先づ右の如く師の君には皆々様御揃ひ遊して御壯健であらせられますから幸に御安心なして下さいませ。

造花も追々と進歩に進歩を重ね、只今では實物同様に巧に造られます、今秋は今子先生や伊藤先生の御熱心なる御指導の下に菊花や、秋草の大籠盛を二度まで 天皇陛下に献上の榮譽を賜りました。

まだく申し上げたい事は數限りがございますが、先づ母校の現状として其あらましを、本末の序もなく申し上げます、嘸かし拙文と御笑ひになりませうが、何卒姉妹の好しみを以て御寛容下さいませ。

終りに臨んで、我が一千名の同胞を産みたる母校の、尙ほますく隆盛ならんことを祝し、併せて卒業生諸姉の御健康を祈ります。

(糸菊 大正元年発行 卒業生諸姉へ)

寄宿舎の昨今

中根せき稿

朝な朝なの霜のためにや、美しかりし紅葉もむなしく錦をぎざみ、日に日に寒くなりました、折から卒業せる姉上様達には、つゝがなくあらせらるゝ事と御祝ひ申上ます。

昨今の寄宿舎の有様を少しばかり、つたなき筆にて御通知申上ます、寄宿舎は姉上様達の御いそしみになつた時分と少しも變りません、只々出で入る人の異なるのみで、各室とも名のゆかしきが如く、文机正しく整頓されて居ります。目下舎生七十五六名、年々に教へ草がしげるのには御驚きでせう、御承知でせうが本年學舎の方が増築された時、撫子の間の所が少し變りまして、新らしも理髮室と、病室も二つになり、誠に便利がよくなりました、狭いながら、追々設備が出来ますから、うれしくてたまりません、室は各々いつもく春風がなやかに薫つて居る様、校長先生、今子先生を此大きな一家の中心として、皆々様の御のこしおき下さいました美風を失はず、姉上よ妹よと、たのしく笑のうちに暮して居ります。

只今は六時起床のベルが鳴ると、たのしき夢の世界からさめて、元氣よくとび起きます、はや東の空のしらむ頃、身仕度をいたして各々菊、蘭、桔梗、藤、竹、菫とわけて門外、門内、内庭、廊下、理髮室、各自習室と掃除をいたします、新たに建てられし教室の長い廊下を、かい／＼しく櫛をかけて立ち働く、日々に磨きあげられたる此廊下は鏡の様……見る毎にうれしき心地がいたします、内庭の落葉を掃く時は、何となく淋しうございます、まだ明けやらぬ静けき町を掃く時は爽快なる心地がいたします。

午後一日の學業を終へて、歸つてからも、皆様餘念もなく、針の道に御いそしみです、六時半から自習時間が始まり八時に終ります、此間はいつも變らぬ各室とも静まりかへつて、聞ゆるものは折々硯箱の

音、ペン先の紙上を走る位、筆を運んで卸出の方は、多分故郷への御便りでせう、沛然たる雨降る夜などは、一層靜かに、雨の音のみやかましく、私達に努力をうながし居るかと疑はれます、自習時間が終へると、待ちあこがれたる如く、かしこに一かたまりに集つて御話會が演ぜられたり、こゝの一隅には手藝に御熱心時折どつと笑ひの聲が、狭き室内にあふれます。

或は故郷にありし時の失敗談、滑稽談などがかはされます、名月の夜などは縁先に出で、ともに故郷を忍び誠に兄弟も及ばぬほど、これがそも當校の寄宿舎の特色でありませう、九時のベルがなりますと、一同廣い寢室に集つて校長先生へ御挨拶、其時折には愛情こもれる御言葉にて、御注意下さる事もございます、斯くしてよき方へよき方へと進むのでございます、各々たのしく床をのべて寝につきました、後は只々音するは折々聞ゆる工場の汽笛の聲かすかに、やさしき友のいびきも身にしむばかり、あの最も愉快な茶話會は昨今都合上ございません、日曜の夜は御菓子が分配せられて、心安氣に一夜をすごします、去年に變らで毎週、花は月曜日の放課後でございますのでいつも室にはゆかしき花の香がみちわたつてゐます、點茶も毎週ございまず、今は本科二年の教室で親切に、今日此頃の寒き夜などでも時の移るのも御忘れなされ、熱心に御教授下さいます、又琴やバイオリンを御習ひなされる御方もあるので、折々奏せられ、さながら御代の太平を奏するが如く一室皆きゝとれる事もございます。

舎生はかくして、うれしく古い御方はよき御模範を御示し下され、此

善良なる家族的舍風を、ますく發揮せようと思ひますから、幸ひ姉上様達御心安く御思召し下さい、どうぞ嘗て此舎に喜怒哀樂とともにされし諸姉上母校の事は永遠に御忘れなく、御出名の折にはかならず御立寄り下され、けつして他に御宿泊などなさらぬ様あれ、校庭の紅葉も名残をとめて待つて居ます。

(糸菊 大正元年発行 卒業生諸姉へ)

付記1 一から三は大森隆子が、四の資料の検証、抜粋は梶山美恵子が行った。

付記2 本学教育学部非常勤講師の中村太貴生先生(元梶山女学園大学附属小学校長)には今子夫人の縁者として、ご協力いただいた。感謝申し上げる。

■注

- (1) 梶山歴史文化館…館内資料リーフレット「梶山正式略歴」
- (2) 梶山歴史文化館…『梶山歴史文化館ガイド』
- (3) 梶山女学園「私学人梶山正式」刊行会代表…梶山正弘『私学人梶山正式』講談社、昭和五十年。
- (4) 同右、五二―五三頁。
- (5) 西脇明美「岐阜県における女子中等教育事情の一考察」『学び舎―教職課程研究』第九号、愛知淑徳大学教育学会、八四―八八頁、二〇一三年。

キーワード…女学校の開設、梶山今子、糸菊

Key words : Establishment of a women's school, Imako SUGIYAMA, ITOGIKU
(Journal of Sugiyama Jogakuen)

* 梶山女学園大学教育学部／梶山女学園中学校・高等学校、校長

** 梶山歴史文化館、館長